青梅市文化財ニュース

第２００号

平成１６年６月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859）

十　三　仏　の　お　念　仏

十三仏配置図

近頃は葬儀の後に行っていた、十三仏のお念仏をする事が、少なくなって来たようです。

このお念仏は和尚さんがするものではなく隣組の代表か、近くの長老さんらが音頭を取って葬儀が終わり、壇払いの会食が済んだ後に行っていました。節回しや唱える念仏の内容も地域性や個人の癖なども入っていていろいろのようですが、伏(ふ)せ鉦(かね)を叩(たた)き十三仏の仏様の名前を 13 回繰り返し唱えるまではだいたい同じのようです。十三仏は初七日から三十三回忌までの間、亡くなった人の成仏をお導きしてくださるという仏様たちです。インドの中有(ちゅうゆう)(亡くなってからまた生まれ変わるまでの輪廻(りんね)の中間)の思想や中国の十王(閻魔大王(えんまだいおう)をはじめとする冥界(めいかい)を司(つかさど)り、亡者の善悪を裁く十人の王)思想を受けて始まったと考えられる亡くなった方々への成仏を願う追善供養の本尊様です。唱え方の一つとして市内の千ヶ瀬地域では後祭壇(あとさいだん)という 3 段ほどの壇飾りの後ろに寺院から借りた十三仏の掛軸を懸け、遺影・位牌・お供物・蝋燭(ろうそく)立てや香炉等で飾った前に線香を点(つ)けて隣組の人たちが坐ります。その音頭取りが「こうみょうへんじょう、じゅっぽうのせかい、ねんぶつすじょう、せっしゃふしゃ」と唱えた後に隣組が声を合わせて適宜に鉦を叩きながら「なーむじゅうさんぶつさんぜのしょぼさつなむあみだー・なーむ・ふーどう・しゃーか・もーんじゅ・ふーげん・じーぞう・みーろく・やーくし・かんのん・せーいし・あーみだ・あーしゅく・だいにち・こーくーぞう」とマッチ棒などを 13 本用意しておき 13 回唱えたら終わるもの

です。この中の「ふーどう・しゃーか」からが十三仏で初七日(しょなのか)の不動明王から始まり二七日(ふたなのか)は釈迦如来、三七日(みなのか)は文殊菩薩で四七日(よなのか)は普賢菩薩、五七日(いつなのか)は良く知られている地蔵菩薩です。六七日(むなのか)は弥勒菩薩(みろくぼさつ)で、七七日(しちなのか)は四十九日(しじゅうくにち)や忌明(きあ)けとも言い、7 日毎の 7 回目のお参り最後の日で薬師如来がその導きをします。四十九日の次の供養は百か日となり観世音菩薩です。百か日は別名「卒哭忌」(そっこうき)ともいい泣くことを卒業し、観音様の慈悲の心によって修行の楽しさを学び喜びへの世界へ導いてくれる日だと言います。そして一周忌は勢至菩薩(せいしぼさつ)、三回忌の阿弥陀如来へと導きます。回忌は周忌とは違い、亡くなったその年を入れて数えますので亡くなって 2 年目に三回忌は来ます(七回忌は 6 年目、十三回忌は 12 年目)。

さて次はあまり聞き慣れない名前の仏様ですが阿〇(門がまえに众)(あしゅく)如来といい七回忌を司ります。次の十三回忌が大日如来で最後の十三番目の仏様は虚空蔵菩薩(こくうぞうぼさつ)で三十三回忌になります。33 年の長い修行で菩薩の世界に入り虚空に抱かれ、これ以降は個人としてではなく、先祖の仲間に入ると言われ、その節目には枝付きの杉の木を削った流れ塔婆を立てていました。十三仏の念仏は亡くなった人とともに残された者がその悲しみや辛さから癒(いや)され生き抜いていく、隣近所が支え合う智恵とも言える念仏のように思えます。

(文責　棚橋 正道)